

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：建築&芸術学部 名前：砂押 かほる 作成日：2023年12月25日

1. 教育の責任

実技課題制作を通して、自己表現の方法、芸術表現の技術力をつけ、思考力を養い、試行錯誤を繰り返すことにより、精度の高い作品を目指します。

主な担当科目

「デザイン・造形美術入門Ⅰ」（実技、デザイン・造形美術メジャー選択必修科目、春学期2単位）

「デザイン・造形美術入門Ⅱ」（実技、デザイン・造形美術メジャー選択必修科目、秋学期2単位）

「デザイン基礎Ⅰ」（実技、デザイン・造形美術メジャー選択必修科目、春学期2単位）

「デザイン基礎Ⅱ」（実技、デザイン・造形美術メジャー選択必修科目、秋学期2単位）

「ビジュアルデザイン・技法研究Ⅰ」（実技、デザイン・造形美術メジャー選択必修科目、春学期2単位）

「ゼミナールⅠ」（演習、必修科目、春学期2単位）

「ゼミナールⅡ」（演習、必修科目、秋学期2単位）

「卒業制作（デザイン）」（演習、必修科目、通年4単位）

2. 教育の理念

学生は自分の資質、感性、技術力を知りません。どこにどんな自分の良さがあるのか、どんな色彩感覚を持っているのか、どんな形態に対する感覚を持っているのか、等々ほとんどが考えたこともなく無垢の状態です。課題制作にしっかり取り組むことにより、自らが自覚して発見するきっかけを与え、励まし促して、完成を目指していきます。その作業を、1点1点丁寧に作品を仕上げて行くことにより、問題解決応力も養われますし、一つ一つの実体験が経験値を蓄積していきます。

無垢でまだ先の見えない、学生本人も実感のない作品制作への取り組み姿勢に、リアルな実体験を共に行うことを指導の根幹においています。

3. 教育の方法

担当科目は、100レベル、200レベル、300レベル、400レベルを担当しています。

100レベル科目に関しては、学部や、将来の希望メジャーを超えて広く学生が履修してきます。造形美術の基本中の基本を入門編として学びます。描く（絵画）、色、イメージを考える（デザイン）、染める（染色工芸）、作る（立体造形）という4つの分野を全てローテーションで制作し学ぶことにより、表現の多様性と共に、表現するという行為の共通する揺るがない大切な意味を学びます。

200レベルは基礎を学ぶ科目と捉え、モチーフイメージから具体的なシンボルマークやロゴタイプデザインに結びつけて行くことを学びます。デザインの表現力のバツと見て誰もがわかる印象的なフォルムを試行錯誤しながら作り込んで行き、その作業を学ぶ大切さに主眼をおきます。さらに、この授業においては、特に多種にわたるデザイン分野を通して共通する「発想力」「表現力」を豊かにするとともに、技術としての「伝達力」を各自の作品発表（プレゼンテーション実習）を経験し身に付けることを学びます。

300レベル科目は、デザインにおけるイラストレーションの表現力を学びます。履修学生は魅力的なイラストの断片は描くことが容易にできます。しかし完成度は低く、作品として成立する前で制作が終わっており、表現力が非常に未熟です。それぞれの学生が面白く良いセンスを持っているにもかかわらず、完成させていく方法を知りません。どこが完成作品となるのか、個性ある魅力的なイラストレーションに仕上げていく方法を学びます。

400レベル科目は、集大成としての卒業制作です。1年間かけてそれぞれが計画を立てて、テーマと内容を決定し進めます。その内容は各自が自由な表現方法、テーマ設定を選び行います。それぞれの制作に最適の表現方法、試行錯誤に寄り添い、指導し進めていきます。完成作品は大手前大学アートセンターに陳列し発表します。

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：建築&芸術学部 名前：砂押 かほる 作成日：2023年12月25日

4. 教育の成果

どんな内容の授業においても、課題を出し、説明し、スタートしてからは、それぞれの発想から表現への段階を理解させ、制作過程とデザイン計画の関連性（なぜそうするのか？）を認識させることを心がけています。単に多様な表現技術や方法を知ることだけでなく、思考し組み立てる論理的思考力を大切にしています。

また、同じ学生を数年間担当し、制作を指導することにより、注意深く成長を見守ることができます。それぞれの学生の得意なところ、苦手なところを作品制作を通して軌道修正し、良いところを伸ばしていくと、思わぬ発見などがあります。また表現方法を変えて制作を行うと、新たな別な面も見出したりします。経験値を重ねていくことによって自分自身を知り、表現の意図や魅力を他者へ伝える力がついていく実感を得て、卒業後の生きていく力の支えになればと考えます。

5. 改善への努力と今後の目標

2020年度、2021年度のコロナ禍の中で教育をへて、2022年度からは、少しずつ本来の対面授業での実技制作の教育を行うことができました。実技授業において、対面での指導がいかに大切かを日々感じます。

非対面授業時の経験をもとに、実際に作品を目にして指導できることの意味を再認識し、どうしたら学生へよりよくわかりやすく伝えることができるかを日々研鑽して指導して行きたいと考えています。

【添付資料】

